川村学園女子大学研究紀要　第10巻　第1号　131頁—153頁　1999年

日本の中学生・高校生の価値観に関する研究[1),2),3)]
——日本，アメリカ，中国，韓国，トルコ，キプロス，ポーランドとの国際比較研究——

松　井　　洋

A Study about Values of Japanese Youths
— A Cross-cultural Study among the Youths in Seven Countries —

Hiroshi MATSUI

要　約

日本の中学生・高校生の価値観について国際比較研究を基に分析した。対象は，日本，アメリカ，中国，韓国，トルコ，キプロス，ポーランドの7ヵ国の中学生・高校生，合計6055名。調査内容は，現代日本の中学・高校生を特徴づけると思われる自己中心—他者志向，個人生活志向—共同体志向，物質主義—精神主義，外的統制—内的統制，現在志向—将来志向の5つの価値観に関する計10問について質問紙調査を行った。

結果は，日本の中学生・高校生は韓国と同様に，自己中心性，個人志向，物質主義が強いが，韓国と異なり外的統制も強く現在志向も韓国より強かった。このように日本の中学生・高校生は「小さく内向きの悪しき個人主義」というような傾向がみられ，このような価値観が「遊び型非行」に代表されるようなわが国の青少年の問題の背景となっていると考えられる。

キーワード：価値観，国際比較研究，中学生，高校生，非行

---

1) 本論文は，筆者の他，中里至正，瀬尾直久（東洋大学），石井隆之（日本・精神技術研究所）によって行われた研究プロジェクトの成果の一部について分析したものである。

2) この研究プロジェクトは，東洋大学井上円了研究助成金，川村学園，私学振興財団の研究補助を受けている。関係各位に感謝します。

3) キプロスの調査はDr. Lefki Anastaiou, ポーランドの調査はDr. Andrzej Mirskiの協力によって行われた。またニューヨーク州立大学バッファロー校のRoger V. Burton教授には調査実施全般に協力をいただいた。あわせて感謝いたします。

昭和50～60年代に比べると低下しつつあったわが国の青少年の非行率が近年また増加し，また，いわゆる「遊び型非行」の割合も増加したという報告がある（犯罪白書平成10年版）。他方，小学校で児童が自分勝手に行動するために学級が崩壊するということが各所で起きているという報道もなされている。このような事態をみるとき，特定のいわゆる「非行少年」や「問題少年」ではない，ごく普通の青少年になにか重大な問題が起きているのではないかという強い危機感を感じる。実際，われわれはこれまで中学生・高校生を対象に何回か国際比較調査や大学生との比較研究を行ってきたが，日本の普通の中学生・高校生は飲酒や性に関するような，いわゆる「軽い」非行に対して大変に許容的であり（中里・松井1997），他者のことを思いやる愛他性にも問題があると言える（松井1991，中里・松井他1992，松井他，1998松井・中里・石井1998，松井1998）。このようにみると，わが国の「普通の」青少年の「生き方」や「考え方」に何か重大な問題があり，それが非行や学級崩壊などの背景となっているという考えがより強まる。前述の研究でわれわれは，わが国の「普通の」青少年の「生き方」や「考え方」における重大な問題として，非行に対する許容性，愛他性，人間関係を中心に論じてきたが，ここではあらためて価値観の問題について検討したい。

ここで価値観の問題をとりあげるのは，いわゆる「遊び型非行」に代表されるわが国の青少年の問題が価値観の問題と深く結びついているのではないかと考えるからである。「遊び型非行」では，貧困とか，本人の強い反社会性や攻撃性というような，はっきりとした非行の原因がみあたらないことが多く，つい万引きしてしまう，なにげなく自転車盗をしてしまう，つい遊び金ほしさに強盗をしてしまうというような，その場の簡単な欲求や衝動が非行の理由であることが多い。しかし，これまでは，遊ぶ金がほしくとも「がまん」をする，勉強がつまらなくとも「努力」するという価値観がわが国の社会にはあり，そのような価値観が，これまで非行や犯罪の抑止力となってきたのではないだろうか。そして，このようなわが国において伝統的にあった価値観が変化したために，「遊び型非行」に代表されるような青少年の問題が起きているのではないだろうか。そして，そのような価値観の望ましくないと思われる変化は，わが国の社会にとって，非行のような表面化した問題より重大な問題と言えるのではないだろうか。

以上の理由で，本論文ではわが国の青少年の問題を価値観という点から検討する。この問題については，上記の我々の研究でも調査項目に含まれており，その一部については分析を行っているが（例えば，中里・松井1997），これまで検討をしてきた，日本，アメリカ，中国，韓国，トルコの調査に加えて，1997年に新たにキプロスとポーランドの中学・高校生の調査結果が得られた。そこで，これを加えて，あらためて他の6カ国の中学生・高校生と比較するこ

とによって，日本の中学・高校生の問題点について価値観という視点から検討しなおしてみる。

日本の中学・高校生の価値観の問題といっても，価値観という概念自体その意味する範囲が広く，それ故，価値観に関する諸研究でも取り上げている内容は多様である。例えば，総務庁によって5年ごとに行われている青年に関する調査では，人生観関係として「経済的に豊かになる」,「社会的な地位を得る」などの生き方について経年的に検討されている。また，L. デビッツ，J. デビッツ，千石（1996）による，アメリカ人から見た日本人についての調査でも，集団志向，権威主義，勤勉さ等，価値観にかかわる多くの要因が指摘されている。このような研究をみても，価値観を一次元や二次元の単純な構造で述べることは困難と思われる。そこで，本研究では中学・高校生の価値観を，現代日本の中学・高校生を特徴づけると思われる自己中心―他者志向，個人生活重視―共同体重視，物質主義―精神主義，外的統制―内的統制，現在志向―将来志向の5つの軸から検討していくことにする。これらの5つの軸が価値観というものを全て網羅しているとは考えないが，非行などの問題行動との関係について研究されてきたもの（例えば，中里他1983）を参考に選定した。

方　法

1. 調査対象者

調査対象者はTable 1. のように，松井（1998）と同様に，日本，アメリカ，中国，韓国，トルコの5か国に，キプロスとポーランドを加えた，中学生，高校生6055名である。なお，各調査項目には欠損値があるが，本論文ではそれらを除いて計算を行っているので，対象者数は各問毎に異なっている。

Table 1. 調査対象者

国	日本	中国	韓国	アメリカ	トルコ	キプロス	ポーランド	合計
人数	1232	816	739	1671	676	500	421	6055

2. 調査時期

日本，アメリカ，中国，韓国は1993年，トルコは1994，キプロスとポーランドは1997年に調査を実施した。

3. 調査方法

質問紙調査を各学校の教室において，各国の調査協力者が実施した。

4. 調査内容

本調査全体では，価値観以外にも非行許容性，道徳意識や性格要因，環境要因等について合計117項目の質問をしているが，本論文では以下に述べる価値観に関する項目のみを取り上げ，他の結果については別に報告する。

また，質問内容の言語による違いを最小にするために，各国の調査協力者によって質問内容についての討論を行い，さらに，翻訳については各国の複数の研究者の校閲を得て調査票を作成した。キプロスとポーランドの質問紙は英文の質問紙を基にしている。

結果と考察

自己中心—他者志向

考え方が自己中心的か，その反対の他者志向的かということについて「人に何と思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ」と「人生は自分のことでなく人のことを考える事が大切だ」という2設問をもうけた。前者は自分の考えをしっかりと持つという意味では望ましい態度と言えるが，「自分のなっとく」ということが強すぎて「人になんと思われよう」ということを軽視しすぎると，やはり問題ある自己中心的傾向と言えるだろう。また，後者はかなり強く他者に対する関心や献身的態度を示しているので他者志向と言えるだろう。両設問はそれぞれ，考え方の基本が自分によっているのか他者によっているのかということを聞いているので自己中心—他者志向という価値観とした。

質問毎にみると，Table 2の「人に何と思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ」の結果は，全体で約50%が「まったくそう思う」と答えており，この設問からは7カ国の中学・高校生は「自分のなっとく」ということを重視していると言える。そしてこの傾向はトルコと中国をのぞいて高校生の方が強い。7カ国の中でこの自己中心的傾向が強いのが，アメリカ，中国，韓国で，反対に弱いのがポーランドである。日本は中間的と言えるが，中学生に対して高校生の自己中心的傾向が強いことが特徴である。

Table 3の「人生は自分のことでなく人のことを考える事が大切だ」については，「まったくそう思う」という答の割合は全体の16.6% であるが，「どちらかというと」を合わせると約60% になり，7カ国の中学・高校生はある程度他者のことを考える他者志向傾向があると言える。7か国のなかでは特にポーランド，キプロス，アメリカ，中国が他者中心的であり，反対

Table 2. 人になんと思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	520	48.4 %	510	47.5 %	30	2.8 %	14	1.3 %	1074	100.0 %
高校	373	63.0 %	206	34.8 %	11	1.9 %	2	.3 %	592	100.0 %
小計	893	53.6 %	716	43.0 %	41	2.5 %	16	1.0 %	1666	100.0 %
中国										
中学	260	57.4 %	180	39.7 %	9	2.0 %	4	.9 %	453	100.0 %
高校	205	57.3 %	145	40.5 %	7	2.0 %	1	.3 %	358	100.0 %
小計	465	57.3 %	325	40.1 %	16	2.0 %	5	.6 %	811	100.0 %
韓国										
中学	203	60.8 %	37	11.1 %	80	24.0 %	14	4.2 %	334	100.0 %
高校	256	64.5 %	36	9.1 %	96	24.2 %	9	2.3 %	397	100.0 %
小計	459	62.8 %	73	10.0 %	176	24.1 %	23	3.1 %	731	100.0 %
日本										
中学	228	36.4 %	193	30.8 %	163	26.0 %	42	6.7 %	626	100.0 %
高校	307	52.1 %	187	31.7 %	84	14.3 %	11	1.9 %	589	100.0 %
小計	535	44.0 %	380	31.3 %	247	20.3 %	53	4.4 %	1215	100.0 %
トルコ										
中学	142	43.2 %	101	30.7 %	55	16.7 %	31	9.4 %	329	100.0 %
高校	121	36.8 %	137	41.6 %	53	16.1 %	18	5.5 %	329	100.0 %
小計	263	40.0 %	238	36.2 %	108	16.4 %	49	7.4 %	658	100.0 %
キプロス										
中学	104	39.0 %	124	46.4 %	35	13.1 %	4	1.5 %	267	100.0 %
高校	104	46.0 %	103	45.6 %	16	7.1 %	3	1.3 %	226	100.0 %
小計	208	42.2 %	227	46.0 %	51	10.3 %	7	1.4 %	493	100.0 %
ポーランド										
中学	11	20.8 %	32	60.4 %	7	13.2 %	3	5.7 %	53	100.0 %
高校	104	29.9 %	217	62.4 %	26	7.5 %	1	.3 %	348	100.0 %
小計	115	28.7 %	249	62.1 %	33	8.2 %	4	1.0 %	401	100.0 %
合計	2943	49.1 %	2220	37.0 %	673	11.2 %	157	2.6 %	5993	100.0 %

Table 3. 人生は自分のことではなく人のことを考えることが大切だ

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	225	21.3 %	719	68.0 %	98	9.3 %	16	1.5 %	1058	100.0 %
高校	109	18.4 %	417	70.3 %	61	10.3 %	6	1.0 %	593	100.0 %
小計	334	20.2 %	1136	68.8 %	159	9.6 %	22	1.3 %	1651	100.0 %
中国										
中学	176	38.7 %	224	49.2 %	46	10.1 %	9	2.0 %	455	100.0 %
高校	52	14.5 %	211	58.8 %	75	20.9 %	21	5.8 %	359	100.0 %
小計	228	28.0 %	435	53.4 %	121	14.9 %	30	3.7 %	814	100.0 %
韓国										
中学	11	3.3 %	87	26.0 %	100	29.9 %	136	40.7 %	334	100.0 %
高校	18	4.5 %	72	18.2 %	157	39.6 %	149	37.6 %	396	100.0 %
小計	29	4.0 %	159	21.8 %	257	35.2 %	285	39.0 %	730	100.0 %
日本										
中学	84	13.4 %	109	17.4 %	291	46.4 %	143	22.8 %	627	100.0 %
高校	55	9.4 %	120	20.4 %	272	46.3 %	141	24.0 %	588	100.0 %
小計	139	11.4 %	229	18.8 %	563	46.3 %	284	23.4 %	1215	100.0 %
トルコ										
中学	27	8.3 %	58	17.7 %	136	41.6 %	106	32.4 %	327	100.0 %
高校	28	8.7 %	86	26.7 %	123	38.2 %	85	26.4 %	322	100.0 %
小計	55	8.5 %	144	22.2 %	259	39.9 %	191	29.4 %	649	100.0 %
キプロス										
中学	57	21.3 %	155	57.8 %	48	17.9 %	8	3.0 %	268	100.0 %
高校	53	23.3 %	119	52.4 %	50	22.0 %	5	2.2 %	227	100.0 %
小計	110	22.2 %	274	55.4 %	98	19.8 %	13	2.6 %	495	100.0 %
ポーランド										
中学	27	50.9 %	20	37.7 %	5	9.4 %	1	1.9 %	53	100.0 %
高校	64	18.2 %	253	72.1 %	30	8.5 %	4	1.1 %	351	100.0 %
小計	91	22.5 %	273	67.6 %	35	8.7 %	5	1.2 %	404	100.0 %
合計	990	16.6 %	2664	44.6 %	1492	25.0 %	830	13.9 %	5976	100.0 %

に韓国，日本，トルコは自己中心的である。

この両設問を合計した値（後の設問は値を逆転）を自己中心傾向得点とし，国による違いについて分散分析をおこなった。分散分析の結果自己中心傾向には有意な差があり（F=139.868, P=.0000），最小有意法による多重比較の結果は，5％水準でみると，**韓国＞トルコ・日本＞中国・アメリカ＞キプロス＞ポーランド**という順に自己中心傾向が強かった。

分散分析の結果最も自己中心的傾向が強く，また，Table 3, 4の両設問に共通して自己中心的であったのが韓国である。トルコも韓国程ではないが自己中心的傾向がみられた。ポーランドはその反対の一貫した他者中心的傾向と言え，キプロスもそれに近い。アメリカと中国は前者では自己中心的といえ，後者では他者中心的という矛盾するような傾向があったが，このことを言い換えると，他者に関する関心を持ちながら，自分の信念も重要と考えるということであり，むしろ望ましい傾向とも考えられる。日本は「人に何と思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ」では中間的で，「人生は自分のことでなく人のことを考える事が大切だ」では自己中心的ということであり，言い換えれば，他者に対する関心が薄く自己中心的といえるが，反面，自分の考えも強く主張しないことであり，考え方の中心が定まっていない傾向と言えるのかもしれない。

個人生活志向―共同体志向

普通われわれは自分の生活を豊かにし，自分が幸福になることを願う。これは当然とも言えるが，行き過ぎると悪しき個人主義に陥るおそれもある。他方，なかには自分よりも他の周りの人々のことを考える人もいる。このような人は自分よりも共同体の全員の幸福を考える人であり，博愛主義と言えるだろう。そこで「何よりも自分の生活を充実させることが大切だ」という設問で前者を，「皆が幸福にならなければ個人の幸福はない」という設問で後者を代表させて，それぞれ個人生活志向と共同体志向と名づけた。この価値観は前述の自己中心―他者志向と近い価値観と言えるが，前者は考える事において自分を中心とするのか他者を考慮するのかということであり，ここで言う価値観は，日常生活において自他どちらの利益や幸福を優先するのかということなので両者を区別した。

質問毎にみると，Table 4の「何よりも自分の生活を充実させることが大切だ」の結果は，全体に肯定的な答が多く，7ヵ国の中学・高校生の多くは人のことよりもまず「自分の生活」が大事だと考えているようである。そして極端に個人生活を重視する傾向が強いのが，韓国であり中学・高校生の両方とも80% 以上が「まったくそう思う」としている。次いで，ポーランド，中国，日本，アメリカがその傾向が強く，反対にトルコとキプロスは弱い。また，トル

Table 4. 何よりも自分の生活を充実させることが大切だ

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	333	31.6 %	488	46.3 %	202	19.2 %	30	2.8 %	1053	100.0 %
高校	209	35.5 %	278	47.2 %	93	15.8 %	9	1.5 %	589	100.0 %
小計	542	33.3 %	766	46.7 %	295	18.0 %	39	2.4 %	1642	100.0 %
中国										
中学	177	39.2 %	179	39.7 %	67	14.9 %	28	6.2 %	451	100.0 %
高校	181	50.6 %	148	41.3 %	26	7.3 %	3	.8 %	358	100.0 %
小計	358	44.3 %	327	40.4 %	93	11.5 %	31	3.8 %	809	100.0 %
韓国										
中学	270	80.8 %	20	6.0 %	41	12.3 %	3	.9 %	334	100.0 %
高校	337	85.3 %	17	4.3 %	39	9.9 %	2	.5 %	395	100.0 %
小計	607	83.3 %	37	5.1 %	80	11.0 %	5	.7 %	729	100.0 %
日本										
中学	202	32.5 %	205	33.0 %	180	28.9 %	35	5.6 %	622	100.0 %
高校	247	42.1 %	201	34.2 %	129	22.0 %	10	1.7 %	587	100.0 %
小計	449	37.1 %	406	33.6 %	309	25.6 %	45	3.7 %	1209	100.0 %
トルコ										
中学	63	19.1 %	93	28.3 %	119	36.2 %	54	16.4 %	329	100.0 %
高校	40	12.2 %	83	25.4 %	144	44.0 %	60	18.3 %	327	100.0 %
小計	103	15.7 %	176	26.8 %	263	40.1 %	114	17.4 %	656	100.0 %
キプロス										
中学	45	16.9 %	68	25.6 %	127	47.7 %	26	9.8 %	266	100.0 %
高校	46	20.4 %	83	36.7 %	83	36.7 %	14	6.2 %	226	100.0 %
小計	91	18.5 %	151	30.7 %	210	42.7 %	40	8.1 %	492	100.0 %
ポーランド										
中学	35	66.0 %	17	32.1 %	1	1.9 %			53	100.0 %
高校	146	41.8 %	157	45.0 %	40	11.5 %	6	1.7 %	349	100.0 %
小計	181	45.0 %	174	43.3 %	41	10.2 %	6	1.5 %	402	100.0 %
合計	2340	39.3 %	2044	34.3 %	1292	21.7 %	281	4.7 %	5967	100.0 %

Table 5. 皆が幸福にならなければ個人の幸福はない

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	216	20.7 %	427	40.8 %	321	30.7 %	82	7.8 %	1046	100.0 %
高校	76	12.9 %	247	41.9 %	234	39.7 %	33	5.6 %	590	100.0 %
小計	292	17.8 %	674	41.2 %	555	33.9 %	115	7.0 %	1636	100.0 %
中国										
中学	160	35.2 %	226	49.8 %	49	10.8 %	19	4.2 %	454	100.0 %
高校	68	18.9 %	190	52.9 %	84	23.4 %	17	4.7 %	359	100.0 %
小計	228	28.0 %	416	51.2 %	133	16.4 %	36	4.4 %	813	100.0 %
韓国										
中学	66	19.8 %	42	12.6 %	132	39.5 %	94	28.1 %	334	100.0 %
高校	59	14.9 %	45	11.4 %	170	42.9 %	122	30.8 %	396	100.0 %
小計	125	17.1 %	87	11.9 %	302	41.4 %	216	29.6 %	730	100.0 %
日本										
中学	114	18.2 %	119	19.0 %	227	36.3 %	166	26.5 %	626	100.0 %
高校	79	13.4 %	139	23.6 %	227	38.5 %	144	24.4 %	589	100.0 %
小計	193	15.9 %	258	21.2 %	454	37.4 %	310	25.5 %	1215	100.0 %
トルコ										
中学	166	50.6 %	117	35.7 %	29	8.8 %	16	4.9 %	328	100.0 %
高校	146	44.6 %	141	43.1 %	25	7.6 %	15	4.6 %	327	100.0 %
小計	312	47.6 %	258	39.4 %	54	8.2 %	31	4.7 %	655	100.0 %
キプロス										
中学	159	60.0 %	92	34.7 %	10	3.8 %	4	1.5 %	265	100.0 %
高校	118	52.0 %	80	35.2 %	25	11.0 %	4	1.8 %	227	100.0 %
小計	277	56.3 %	172	35.0 %	35	7.1 %	8	1.6 %	492	100.0 %
ポーランド										
中学	21	39.6 %	24	45.3 %	6	11.3 %	2	3.8 %	53	100.0 %
高校	44	12.6 %	138	39.7 %	136	39.1 %	30	8.6 %	348	100.0 %
小計	65	16.2 %	162	40.4 %	142	35.4 %	32	8.0 %	401	100.0 %
合計	1494	25.1 %	2034	34.0 %	1681	28.2 %	751	12.6 %	5960	100.0 %

コとポーランド以外は，高校生の方が個人生活志向が強い。

Table 5の「皆が幸福にならなければ個人の幸福はない」は，全体で「まったくそう思うが約25%，「どちらかというと」が約34%で，比較的肯定意見が多かった。特に，キプロスとトルコが肯定的答が多く共同体志向といえ，中国もその傾向がある。反対に，韓国と日本は共同体志向が弱い。また，7カ国に概ね共通して中学生より高校生の方が弱い。この傾向は前問とも一致していて，中学生より高校生のほうが皆のことより自分の幸福を優先させる価値観を持つことが多いと言えよう。

この両設問を合計した値（後の設問は値を逆転）を個人生活志向得点とし，国による違いについて分散分析をおこなった結果，個人生活志向には有意な差があり（F=363.107, P=.0000），多重比較の結果は，**韓国＞日本・ポーランド＞アメリカ＞中国＞キプロス・トルコ**という順に個人生活を重視する傾向が強かった。

Table 4と5の両設問の傾向は概ね一致しており，分散分析の結果どおりの傾向があると言える。つまり，韓国と日本，ポーランドは個人生活重視で，トルコとキプロスは共同体重視と言える。前項の自己中心―他者志向の価値観はこの個人生活志向―共同体志向と似たところのある価値観なので，両者を合わせて考察すると，韓国と日本は考え方の上でも幸福追求の上でも個人を重視すると言える。反対にキプロスは他者や共同体を重視すると言える。トルコは前項の自己中心性ということについては，自分の信念や考えが大事だという傾向があったが，この個人生活，共同体という軸では，共同体志向が強かった。つまり，自分の考えを大事にするが他者の福利も考えるということとなる。また，ポーランドは全体として他者志向の傾向があるが「自分の生活を充実」ということも強調されている。アメリカと中国はこの問題については中間的と言える。

ちなみに，他者のことを考え，他者のために援助しようと考える愛他性に関する，この調査の8つの設問の合計について分散分析すると，国によって有意な差があり（F=137.056, P=.0000），多重比較によると，愛他性が強い順に**トルコ＞キプロス・ポーランド＞中国＞アメリカ＞韓国・日本**という順になる。このことを加えて考えてみると，トルコ，キプロス，ポーランドの中学・高校生は他者のことを考え，配慮する傾向が強いが，日本と韓国の中学・高校生はいずれの場合でも自分中心で他者のことを考えない傾向が強いと言えるだろう。

物質主義―精神主義

金があれば幸福になれると考え，そのため金に強い執着や価値観を持つのか，その反対に物や金以外のものを重視するのかということについて「人生にはお金が何より大切だ」と「お金

Table 6. 人生にはお金がなにより大切だ

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	69	6.5 %	106	10.0 %	555	52.1 %	335	31.5 %	1065	100.0 %
高校	39	6.6 %	91	15.4 %	306	51.8 %	155	26.2 %	591	100.0 %
小計	108	6.5 %	197	11.9 %	861	52.0 %	490	29.6 %	1656	100.0 %
中国										
中学	22	4.8 %	72	15.9 %	180	39.6 %	180	39.6 %	454	100.0 %
高校	28	7.8 %	111	31.0 %	149	41.6 %	70	19.6 %	358	100.0 %
小計	50	6.2 %	183	22.5 %	329	40.5 %	250	30.8 %	812	100.0 %
韓国										
中学	51	15.3 %	31	9.3 %	189	56.6 %	63	18.9 %	334	100.0 %
高校	67	16.9 %	43	10.8 %	224	56.4 %	63	15.9 %	397	100.0 %
小計	118	16.1 %	74	10.1 %	413	56.5 %	126	17.2 %	731	100.0 %
日本										
中学	116	18.6 %	138	22.1 %	257	41.2 %	113	18.1 %	624	100.0 %
高校	81	13.8 %	145	24.6 %	258	43.8 %	105	17.8 %	589	100.0 %
小計	197	16.2 %	283	23.3 %	515	42.5 %	218	18.0 %	1213	100.0 %
トルコ										
中学	19	5.8 %	36	10.9 %	124	37.6 %	151	45.8 %	330	100.0 %
高校	19	5.8 %	48	14.8 %	142	43.7 %	116	35.7 %	325	100.0 %
小計	38	5.8 %	84	12.8 %	266	40.6 %	267	40.8 %	655	100.0 %
キプロス										
中学	8	3.0 %	17	6.3 %	127	47.2 %	117	43.5 %	269	100.0 %
高校	11	4.8 %	31	13.7 %	118	52.0 %	67	29.5 %	227	100.0 %
小計	19	3.8 %	48	9.7 %	245	49.4 %	184	37.1 %	496	100.0 %
ポーランド										
中学	3	5.7 %	10	18.9 %	25	47.2 %	15	28.3 %	53	100.0 %
高校	20	5.7 %	60	17.1 %	205	58.6 %	65	18.6 %	350	100.0 %
小計	23	5.7 %	70	17.4 %	230	57.1 %	80	19.9 %	403	100.0 %
合計	553	9.2 %	944	15.8 %	2869	47.9 %	1618	27.0 %	5984	100.0 %

だけでは幸福になれない」という2設問をもうけた。前者はお金が大切ということなので物質主義，後者はそれ以外が大切ということで精神主義とした。

Table 6の「人生にはお金が何より大切だ」の結果は，各国ともあまり肯定的ではなく，「まったくそう思う」という割合は全体の10%にも満たないが，なかでは物質主義的傾向が強いのが，日本と韓国で，反対に弱いのがキプロスとトルコである。日本と韓国の物質主義的傾向はTable 6の値からはそれほど強くないと言えるのかもしれないが「お金が何より大切だ」と何よりと強調した設問であるから，日本の「まったくそう思う」が16.2%，「どちらかというとそう思う」が23.3%という値は，かなり強い金銭志向を示しているといえるだろう。

Table 7の「お金だけでは幸福になれない」については，各国とも肯定的であり，「そう思わない」という否定的な答の割合は全体の10%にも満たない。つまり，中学・高校生は金以外にも大切なものがあると感じていると言えよう。7カ国の中ではトルコは肯定的傾向が特に強く，韓国，アメリカは否定的傾向があり，日本，中国もそれに次いで否定的傾向が強い。

Table 6と7の設問を合計した値（後の設問は値を逆転）を物質主義傾向得点とし，国による違いについて分散分析をおこなった結果，物質主義傾向には有意な差があり（F=30.601, P=.0000），多重比較の結果は，**韓国・日本＞アメリカ・ポーランド・中国＞キプロス・トルコ**という順に物質主義傾向が強かった。

自己中心の場合は2つの設問間にニュアンスの違いがあったため，国によって二つの質問の回答にずれがあったが，この物質主義についてはそのようなずれはあまりなく，両者を合わせた値の分散分析の多重比較に準じた傾向，すなわち，韓国と日本は物質主義が強く，トルコとキプロスは弱いという傾向が一貫して現れた。

外的統制—内的統制

自分の人生が自分自身の努力によるものなのか，そのような努力は虚しいもので運などで決まってしまうものかということについて「人生は運に左右されることが多い」と「成功はその人の努力しだいだ」という2設問をもうけた。つまり，外的統制と内的統制と言うことができる。

質問毎にみると，Table 8の「人生は運に左右されることが多い」の結果は，7カ国全体で「まったくそう思う」の割合は15%であまり多くなく，7ヵ国の中学・高校生は人生は運だけではない，自分の努力なども大事だと考えていると言えよう。その中で，外的統制的傾向が強いのが，日本・トルコ・キプロス，反対に弱いのが中国・韓国・アメリカである。ポーランドは中学生と高校生の傾向が正反対で，中学生は外的統制傾向が極めて強く，高校生は内的統制

Table 7. 人生はお金だけでは幸福になれない

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	286	27.0 %	375	35.4 %	253	23.9 %	146	13.8 %	1060	100.0 %
高校	194	33.0 %	253	43.1 %	97	16.5 %	43	7.3 %	587	100.0 %
小計	480	29.1 %	628	38.1 %	350	21.3 %	189	11.5 %	1647	100.0 %
中国										
中学	202	45.2 %	122	27.3 %	69	15.4 %	54	12.1 %	447	100.0 %
高校	133	37.6 %	127	35.9 %	67	18.9 %	27	7.6 %	354	100.0 %
小計	335	41.8 %	249	31.1 %	136	17.0 %	81	10.1 %	801	100.0 %
韓国										
中学	174	52.4 %	31	9.3 %	90	27.1 %	37	11.1 %	332	100.0 %
高校	184	46.3 %	35	8.8 %	148	37.3 %	30	7.6 %	397	100.0 %
小計	358	49.1 %	66	9.1 %	238	32.6 %	67	9.2 %	729	100.0 %
日本										
中学	258	41.3 %	177	28.3 %	137	21.9 %	53	8.5 %	625	100.0 %
高校	306	52.0 %	160	27.2 %	98	16.6 %	25	4.2 %	589	100.0 %
小計	564	46.5 %	337	27.8 %	235	19.4 %	78	6.4 %	1214	100.0 %
トルコ										
中学	195	58.9 %	81	24.5 %	20	6.0 %	35	10.6 %	331	100.0 %
高校	171	52.3 %	120	36.7 %	16	4.9 %	20	6.1 %	327	100.0 %
小計	366	55.6 %	201	30.5 %	36	5.5 %	55	8.4 %	658	100.0 %
キプロス										
中学	139	52.1 %	66	24.7 %	32	12.0 %	30	11.2 %	267	100.0 %
高校	107	47.1 %	79	34.8 %	22	9.7 %	19	8.4 %	227	100.0 %
小計	246	49.8 %	145	29.4 %	54	10.9 %	49	9.9 %	494	100.0 %
ポーランド										
中学	22	41.5 %	19	35.8 %	7	13.2 %	5	9.4 %	53	100.0 %
高校	128	36.6 %	152	43.4 %	40	11.4 %	30	8.6 %	350	100.0 %
小計	150	37.2 %	171	42.4 %	47	11.7 %	35	8.7 %	403	100.0 %
合計	2506	42.0 %	1805	30.3 %	1098	18.4 %	555	9.3 %	5964	100.0 %

Table 8. 人生は運に左右されることが多い

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	96	9.1 %	330	31.3 %	440	41.7 %	190	18.0 %	1056	100.0 %
高校	34	5.8 %	170	28.8 %	293	49.6 %	94	15.9 %	591	100.0 %
小計	130	7.9 %	500	30.4 %	733	44.5 %	284	17.2 %	1647	100.0 %
中国										
中学	43	9.5 %	93	20.6 %	109	24.2 %	206	45.7 %	451	100.0 %
高校	37	10.4 %	103	29.0 %	120	33.8 %	95	26.8 %	355	100.0 %
小計	80	9.9 %	196	24.3 %	229	28.4 %	301	37.3 %	806	100.0 %
韓国										
中学	27	8.1 %	39	11.7 %	172	51.7 %	95	28.5 %	333	100.0 %
高校	60	15.1 %	36	9.1 %	240	60.5 %	61	15.4 %	397	100.0 %
小計	87	11.9 %	75	10.3 %	412	56.4 %	156	21.4 %	730	100.0 %
日本										
中学	155	24.7 %	189	30.1 %	197	31.4 %	86	13.7 %	627	100.0 %
高校	180	30.6 %	176	29.9 %	180	30.6 %	52	8.8 %	588	100.0 %
小計	335	27.6 %	365	30.0 %	377	31.0 %	138	11.4 %	1215	100.0 %
トルコ										
中学	73	22.5 %	145	44.6 %	73	22.5 %	34	10.5 %	325	100.0 %
高校	49	15.2 %	146	45.2 %	97	30.0 %	31	9.6 %	323	100.0 %
小計	122	18.8 %	291	44.9 %	170	26.2 %	65	10.0 %	648	100.0 %
キプロス										
中学	41	15.6 %	124	47.1 %	75	28.5 %	23	8.7 %	263	100.0 %
高校	45	19.9 %	122	54.0 %	42	18.6 %	17	7.5 %	226	100.0 %
小計	86	17.6 %	246	50.3 %	117	23.9 %	40	8.2 %	489	100.0 %
ポーランド										
中学	30	56.6 %	19	35.8 %	4	7.5 %			53	100.0 %
高校	24	6.9 %	107	30.7 %	176	50.6 %	41	11.8 %	348	100.0 %
小計	54	13.5 %	126	31.4 %	180	44.9 %	41	10.2 %	401	100.0 %
合計	896	15.0 %	1805	30.3 %	2228	37.4 %	1025	17.2 %	5954	100.0 %

Table 9. 成功はその人の努力しだいだ

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	664	62.2 %	360	33.7 %	34	3.2 %	10	.9 %	1068	100.0 %
高校	343	58.0 %	221	37.4 %	21	3.6 %	6	1.0 %	591	100.0 %
小計	1007	60.7 %	581	35.0 %	55	3.3 %	16	1.0 %	1659	100.0 %
中国										
中学	354	78.0 %	92	20.3 %	4	.9 %	4	.9 %	454	100.0 %
高校	207	57.7 %	140	39.0 %	10	2.8 %	2	.6 %	359	100.0 %
小計	561	69.0 %	232	28.5 %	14	1.7 %	6	.7 %	813	100.0 %
韓国										
中学	247	74.2 %	21	6.3 %	50	15.0 %	15	4.5 %	333	100.0 %
高校	227	57.3 %	34	8.6 %	112	28.3 %	23	5.8 %	396	100.0 %
小計	474	65.0 %	55	7.5 %	162	22.2 %	38	5.2 %	729	100.0 %
日本										
中学	379	60.4 %	155	24.7 %	62	9.9 %	31	4.9 %	627	100.0 %
高校	293	49.7 %	179	30.4 %	100	17.0 %	17	2.9 %	589	100.0 %
小計	672	55.3 %	334	27.5 %	162	13.3 %	48	3.9 %	1216	100.0 %
トルコ										
中学	183	56.0 %	108	33.0 %	20	6.1 %	16	4.9 %	327	100.0 %
高校	175	53.5 %	127	38.8 %	7	2.1 %	18	5.5 %	327	100.0 %
小計	358	54.7 %	235	35.9 %	27	4.1 %	34	5.2 %	654	100.0 %
キプロス										
中学	166	62.6 %	83	31.3 %	15	5.7 %	1	.4 %	265	100.0 %
高校	119	52.7 %	87	38.5 %	15	6.6 %	5	2.2 %	226	100.0 %
小計	285	58.0 %	170	34.6 %	30	6.1 %	6	1.2 %	491	100.0 %
ポーランド										
中学	25	47.2 %	25	47.2 %	2	3.8 %	1	1.9 %	53	100.0 %
高校	113	32.3 %	180	51.4 %	51	14.6 %	6	1.7 %	350	100.0 %
小計	138	34.2 %	205	50.9 %	53	13.2 %	7	1.7 %	403	100.0 %
合計	3504	58.6 %	1818	30.4 %	506	8.5 %	155	2.6 %	5983	100.0 %

傾向が強い。

Table 9の「成功はその人の努力しだいだ」は，全体では「まったくそう思う」と「どちらかというとそう思う」を合わせて約90%の中学・高校生が肯定的で，「そう思わない」は2.6% しかいない。つまり7ヵ国の中学・高校生は努力ということにかなり前向きと言える。国による違いは前問ほどは大きくないが，中国とアメリカは努力しだいという傾向が特に強く，韓国，日本，ポーランドは弱い。また，全体的に高校生より中学生のほうが努力志向である。

Table 8と9の値を合計した値（後の設問は値を逆転）を外的統制傾向得点とし，国による違いについて分散分析をおこなった結果，外的統制傾向には有意な差があり（F=88.010, P=.0000），多重比較の結果は，**日本・トルコ・ポーランド・キプロス＞韓国・アメリカ＞中国**という順に外的統制の傾向が強かった。

Table 8, 9の両設問の結果は概ね一致していて，それ故，分散分析の多重比較の結果どおりのことが言えるようである。つまり，日本・トルコ・ポーランド・キプロスの中学・高校生が外的統制というということになる。この外的統制という態度は社会的制度や経済的状況によって，それが恵まれないからしかたがない，自分の力ではどうしようもないと考えざるを得ないような問題が社会にあるという場合と，恵まれているからかえって現状に安住してしまうという場合があるだろう。そして，トルコ，ポーランド，キプロスの各国はそれぞれかなり深刻な社会的，政治的，経済的問題を抱えていると言われており，前者に該当すると考えられ，日本は近年の経済的混乱があるとはいえ後者に該当すると言えるだろう。

現在志向―将来志向

人はつい目先のことを考えてしまう，今楽しいことをしたい，今楽をしたいという気持ちはだれしもあるが，このように今のことを重視する価値観を現在志向といい，反対に，今はつらかったり楽しくなくとも自分の将来のことを考えて努力することを将来志向と呼ぶ。「今が楽しければよい」は前者，「今より将来のために努力する」は後者の傾向を示す設問である。

質問毎にみると，Table 10の「今が楽しければよい」の結果は，全体では「そう思う」と「そう思わない」の割合はだいたい半々である。そして，現在志向傾向が強いのが，アメリカ・キプロス，そして韓国・ポーランドでありこれらの国では特に中学生に現在志向の傾向が強い。中国は現在志向が弱く，特に中学生に弱い。日本とトルコはどちらかというと現在志向が弱いほうである。

Table 11の「今より将来のために努力する」は全体では「まったくそう思う」と「どちらかというとそう思う」を合わせて約70%の中学・高校生が肯定的であり，7ヵ国の中学・高校生

Table 10. 今が楽しければよい

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	233	22.0 %	633	59.9 %	156	14.8 %	35	3.3 %	1057	100.0 %
高校	78	13.2 %	360	60.8 %	124	20.9 %	30	5.1 %	592	100.0 %
小計	311	18.9 %	993	60.2 %	280	17.0 %	65	3.9 %	1649	100.0 %
中国										
中学	13	2.9 %	53	11.7 %	163	35.9 %	225	49.6 %	454	100.0 %
高校	29	8.1 %	83	23.1 %	165	46.0 %	82	22.8 %	359	100.0 %
小計	42	5.2 %	136	16.7 %	328	40.3 %	307	37.8 %	813	100.0 %
韓国										
中学	111	33.3 %	53	15.9 %	117	35.1 %	52	15.6 %	333	100.0 %
高校	102	25.8 %	53	13.4 %	162	40.9 %	79	19.9 %	396	100.0 %
小計	213	29.2 %	106	14.5 %	279	38.3 %	131	18.0 %	729	100.0 %
日本										
中学	94	15.0 %	114	18.2 %	227	36.2 %	192	30.6 %	627	100.0 %
高校	99	16.8 %	130	22.1 %	244	41.4 %	116	19.7 %	589	100.0 %
小計	193	15.9 %	244	20.1 %	471	38.7 %	308	25.3 %	1216	100.0 %
トルコ										
中学	55	17.0 %	116	35.8 %	89	27.5 %	64	19.8 %	324	100.0 %
高校	31	9.6 %	52	16.1 %	136	42.1 %	104	32.2 %	323	100.0 %
小計	86	13.3 %	168	26.0 %	225	34.8 %	168	26.0 %	647	100.0 %
キプロス										
中学	72	27.3 %	155	58.7 %	30	11.4 %	7	2.7 %	264	100.0 %
高校	37	16.4 %	127	56.4 %	43	19.1 %	18	8.0 %	225	100.0 %
小計	109	22.3 %	282	57.7 %	73	14.9 %	25	5.1 %	489	100.0 %
ポーランド										
中学	23	43.4 %	26	49.1 %	4	7.5 %			53	100.0 %
高校	32	9.2 %	158	45.4 %	118	33.9 %	40	11.5 %	348	100.0 %
小計	55	13.7 %	184	45.9 %	122	30.4 %	40	10.0 %	401	100.0 %
合計	1009	16.9 %	2122	35.6 %	1786	30.0 %	1045	17.5 %	5962	100.0 %

Table 11. 今よりも将来のために努力する

	まったくそう思う		どちらかというとそう思う		少しはそう思う		そう思わない			
アメリカ										
中学	242	23.2 %	479	45.9 %	278	26.6 %	45	4.3 %	1044	100.0 %
高校	169	28.9 %	265	45.4 %	143	24.5 %	7	1.2 %	584	100.0 %
小計	411	25.2 %	744	45.7 %	421	25.9 %	52	3.2 %	1628	100.0 %
中国										
中学	286	63.1 %	151	33.3 %	11	2.4 %	5	1.1 %	453	100.0 %
高校	166	46.2 %	170	47.4 %	22	6.1 %	1	.3 %	359	100.0 %
小計	452	55.7 %	321	39.5 %	33	4.1 %	6	.7 %	812	100.0 %
韓国										
中学	154	46.4 %	56	16.9 %	103	31.0 %	19	5.7 %	332	100.0 %
高校	196	50.0 %	54	13.8 %	127	32.4 %	15	3.8 %	392	100.0 %
小計	350	48.3 %	110	15.2 %	230	31.8 %	34	4.7 %	724	100.0 %
日本										
中学	145	23.2 %	165	26.4 %	251	40.2 %	64	10.2 %	625	100.0 %
高校	82	13.9 %	175	29.8 %	278	47.3 %	53	9.0 %	588	100.0 %
小計	227	18.7 %	340	28.0 %	529	43.6 %	117	9.6 %	1213	100.0 %
トルコ										
中学	175	53.0 %	126	38.2 %	19	5.8 %	10	3.0 %	330	100.0 %
高校	181	55.7 %	119	36.6 %	9	2.8 %	16	4.9 %	325	100.0 %
小計	356	54.4 %	245	37.4 %	28	4.3 %	26	4.0 %	655	100.0 %
キプロス										
中学	83	31.3 %	125	47.2 %	50	18.9 %	7	2.6 %	265	100.0 %
高校	63	28.0 %	114	50.7 %	41	18.2 %	7	3.1 %	225	100.0 %
小計	146	29.8 %	239	48.8 %	91	18.6 %	14	2.9 %	490	100.0 %
ポーランド										
中学	29	54.7 %	17	32.1 %	5	9.4 %	2	3.8 %	53	100.0 %
高校	66	19.0 %	167	48.1 %	99	28.5 %	15	4.3 %	347	100.0 %
小計	95	23.8 %	184	46.0 %	104	26.0 %	17	4.3 %	400	100.0 %
合計	2038	34.3 %	2193	36.9 %	1443	24.3 %	266	4.5 %	5940	100.0 %

の将来志向は強いと言える。特に中国とトルコはその傾向が強い。それに対して，日本の中学・高校生は7カ国のなかで例外的に将来志向が弱い。

Table 10と11の両設問を合計した値（後の設問は値を逆転）を現在志向傾向得点とし，国による違いについて分散分析をおこなった結果，現在志向傾向には有意な差があり（F=194.153, P=.0000），多重比較の結果は，**アメリカ・キプロス＞ポーランド・日本＞韓国＞トルコ＞中国**という順に現在志向の傾向が強かった。

国によってTable 10と11の両設問の結果にずれがある場合がある。分散分析の結果最も将来志向が強い中国はどちらの設問でも一貫して将来志向を示している。しかし，現在志向が最も強いアメリカは「今が楽しければよい」という傾向が大変に強いが，一方「将来のための努力もする」というところもある。このような傾向は，日本を除く他の国にも見られる。例外的なのが日本で，「今が楽しければよい」という言わば享楽的態度はそれほど強くないにもかかわらず，Table 11のように，将来のために努力をしようという傾向が大変に弱い。このことはいわゆる「意欲」に欠けるということなのだろうか。今回の調査では問題行動にに関する項目で「私は何かをしたいという意欲も元気もない」という質問をしている。結果は4選択肢のうち「まったくそのとおりだ」と「少しはそんなところがある」という肯定的な答を合わせた割合はアメリカ5.5%，キプロス6.7%，中国9.0%，ポーランド10.2%，トルコ10.4%，日本23.4%，韓国31.1%であり，意欲や元気がないというのは7カ国の中学・高校生において例外的で少数しかいないが，韓国と日本の高校生ではかなり多い。外的統制，現在志向の結果と合わせて考えると，日本の特に高校生が「努力」とか「意欲」いうような人生に対して積極的に取り組む価値観に欠けると言える。

討　論

7カ国の中学・高校生の価値観について述べたが，各国の特徴を比較するためにFig. 1を作成した。Fig. 1は各国の傾向を説明しやすくするために，各々の価値観の平均得点というような言わば絶対的な値ではなく，7カ国の間の中高別の順序を基準にした相対的な傾向で示してある。Fig. 1の値は図の外側に広がるにつれ相対的傾向が強く，内側は弱いことを表している。

国別にみると，それぞれ全く違う図の形態であり，青少年の価値観が国や文化によって異なるということが言えるだろう。

まずアメリカから見ると，アメリカの特徴は他の国の中学・高校生より現在志向が強く，外的統制は弱いということである。現在志向が強いことは結果で見たように，「今が楽しければ

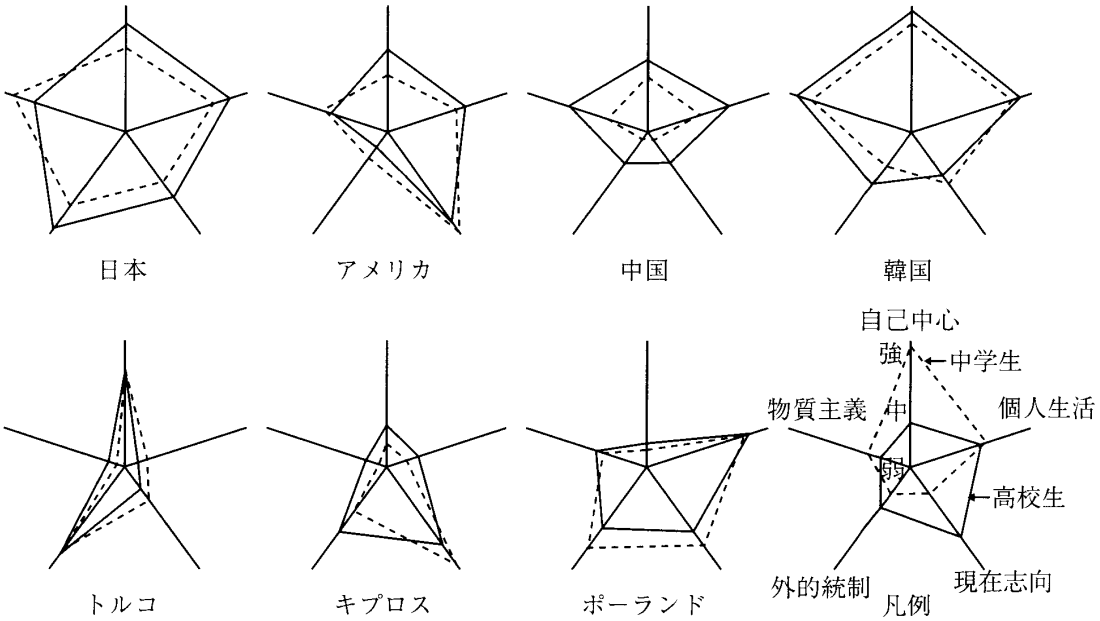

Fig. 1　7ヵ国の中学・高校生の価値観の特徴（7ヵ国の中高別の順位に基づく相対的地位）

よい」という享楽志向のところがあることを示しているが，外的統制が弱い，言い換えれば内的統制が強いということは，人生は運ではなく努力しだいだと考えるところもあるということで，享楽的なところがあっても積極的な価値観と言えるだろう。

中国は全体的に図が小さく内側に位置しており，このことは問題があると一般に考えられることの多い価値観が強くないということである。そして，その傾向は中学生に特に顕著である。中国の中学生は大変に望ましい価値観の持ち主と言えるだろう。特に，内的統制と将来志向が強く，このことは自分で努力することによって自分自身の人生を切り開いていこうとする積極的な価値観であることを示している。他方，中学生と高校生との違いがかなり大きいということは，中学生では大変に健全といえる価値観を持っているが，高校生になると望ましくない方向にかなり変化するということであり，中国の若者の問題はそのへんにあるのかもしれない。

韓国は中国とは対照的に図が大きく，このことは韓国の中学・高校生の価値観が望ましくないものであることを示している。特に，自己中心，個人生活志向，物質主義については7カ国中もっとも強い傾向がある。悪い言い方をすれば利己的で自分が豊かになることを第一とする拝金主義という傾向である。そして，これらの傾向は現在志向を除いて中学生より高校生に強い。つまり，中国と同様に，高校生になると「悪く」なる傾向がある。本論文では価値観の問題を中心に論じているために他の設問の結果を紹介しなかったが，社会満足度についての調査

結果は韓国の中学・高校生の満足度は極端に低いものであった。つまり，自己中心，個人生活志向，物質主義はこのように社会に対する不満があるために，社会全体ではなく自分の利益を追求してしまうということなのかもしれない。他方，韓国の中学・高校生は外的統制や現在志向は強くなく，どちらかというと内的統制，将来志向が強い傾向がある。つまり，かなり利己的で拝金主義といえる傾向があるが，しかし，そのために自分で努力しようという積極的な傾向があるわけである。

トルコは図が小さく，特に物質主義や個人生活志向の傾向が弱く，現在志向も弱い。しかし，自己中心と外的統制の傾向がある。自己中心傾向と共同体志向の傾向は矛盾するようだが，前者は自分のことを「考え」るという設定で，後者は他者の「生活や幸福」という言わば実際的な設定における自他の問題であることが異なる。前述のようにトルコの中学・高校生は愛他性が強いということや物質主義でないことからも，他者や社会を向いた価値観であり利己的な価値観とは言えないだろう。その意味で全体としてかなり健全と言える価値観と考えられる。

キプロスはトルコ同様図が小さく望ましい価値観であることを示しているが，現在志向についてはかなり強い傾向があり，特に「今が楽しければよい」という傾向がある。外的統制傾向も強いので，将来のために努力して人生を切り開いていくというより，努力してもしょうがないから今を楽しもうという傾向と言えるだろう。この調査はキプロス共和国，つまりギリシャ側のキプロスで行っているが，報道されているように，キプロスはギリシャ系地区とトルコ系地区に分断され，両者は緊張状態にある。これは推測だが，このような状況が中学・高校生の将来展望を失わせているのかもしれない。

ポーランドは自己中心的でなく，他者志向が大変に強いが，個人生活志向も強い。これは，個々の設問に対する回答から考えると，「何よりも自分の生活を充実させることが大切だ」と言う項目で肯定的な答が多かったことなどから，他者のことを配慮するが取り敢えずは自分の生活を良くしたいという傾向であると考えられる。このような傾向の原因についてはわからないが，実際に今の自分の生活が充実（例えば経済的に）していないのかもしれない。ポーランドの中学・高校生はまた，現在志向や外的統制の傾向もみられ，努力しないで自分の今の生活を楽しもうという傾向が少し強いと言えよう。

日本は図の大きさが韓国と並んで大きく，価値観にかなりの問題があるということを示唆する。また，この問題ある傾向は中学生より高校生の方が強い。日本は韓国と同様に，自己中心，個人生活志向，物質主義の傾向が強いが，日本の中・高校生が韓国と異なるのは外的統制も強いということであり，現在志向もまた日本のほうが韓国より強い。韓国の場合は，自分が豊かになりたいというある意味で利己的と言える価値観が強かったが，しかし，そのためには自分

の努力が必要だという積極性が日本よりはあった。それに対して，日本の中学・高校生はその積極性に欠けるということが韓国との違いである。

このような日本の中学・高校生に「努力」や「意欲」というような前向きに生きようという価値観が欠けているということはどのような現象であり，どのような原因が考えられるのであろうか。青少年に問題があると，例えば林の「父性の復権」(1996) のように，まず，親や家庭の問題が原因とされ，そして学校の問題も原因と考えられる。もちろん親や家庭や学校は中学・高校生の問題の重要な原因であると考えられる。しかし，親や家庭や学校はそれだけ独立して成立しているものではなく，日本の社会に組み込まれた一部にすぎない。つまり，このようなことは中学・高校生だけの問題ではなく日本の社会の問題ではないかということである。このような社会の問題について例えば，千石は「まじめの崩壊」(1991) のなかで，日本では1977年ころから「勤倹力行」と言う価値観が崩壊したと述べている。また，小谷 (1998) は，「乏しい土地を有効に利用し，多くの人間を「食わせる」必要が，日本の農民のなかに「ガンバリ」の伝統を根づかせた。しかし，一度豊かさを手にすれば「ガンバリ」つづける根拠は希薄になる。」。そして，明治期も第二次世界大戦の敗戦後も「ガンバリ」続けたが，低成長の時代を迎え，さらに金満と投機の80年代に「ガンバリ教」は崩壊したと述べている。確かに，バブル経済とその崩壊は日本人が持っていた「まじめさ」，「ガンバリ」，「努力」という特性に著しい悪影響を与えたであろう。しかし，この十年の日本経済と社会の激変を待たなくとも，日本人の価値観は大きく変わってきていたと言えるのではないだろうか。例えば，加藤 (1987) は第二次世界大戦以前からの調査結果をまとめて，日本の若者の「くらし方」は「清く正しくくらす」と「社会のためにすべてをささげてくらす」が年々減り，「自分の趣味にあった暮らし」と「その日その日をのんきにくらす」が増加して，1953年には既に両者の割合がすでに逆転していると述べている。すなわち，日本の中学・高校生の価値観が世界の7カ国のなかで比べて，自己中心的で意欲に欠けるという特徴，言い換えれば「小さな内向きの悪しき個人主義」だということは，大きな流れとしては第二次世界大戦後にはじまった変化ではないかということである。そして「小さな内向きの悪しき個人主義」は，まさに「遊び型非行」を特徴付ける価値観と言えるだろう。

ここで残る問題は，このような価値観が近年強くなっているのか，そしてこれからどうなるのかという問題である。この問題について，われわれは今，1988年，1993年に続いて本年，1998年に日本の中学・高校生を対象に過去と同様の調査を行っている。この結果については分析中であり近く公表する予定である。

もう一つの問題は，ここで取り上げた価値観をはじめ，道徳意識，非行的態度，愛他性など

が，どのような環境要因によって形成されるのかという問題である。これについても今，分析を行っており，日本の特徴について明らかにする予定である。

最後に，上記のような日本の中学・高校生の価値観は望ましくないと述べてきた。それはこのような価値観が非行や愛他性の低さと関係があるという結果があるからである。しかし，これからも日本人の価値観がこのようなものであるとしたら，このような価値観の問題点を指摘するよりは，このような価値観を前提として社会や教育のありかたを考えるべきなのかもしれない。そして，これがわれわれの将来にとっての最も重要な課題かもしれない。

引用文献

デビッツ L., デビッツ J., 千石　保，1996『日本人のライフスタイル』，サイマル出版会.

林　道義，1996,『父性の復権』，中央公論社.

法務省法務総合研究所編，1998,『犯罪白書　平成10年版』.

加藤隆勝，1987,『青年期の意識構造―その変容と多様化』，誠信書房.

小谷　敏，1998,『若者たちの変貌―世代をめぐる社会学的物語』，世界思想社.

松井　洋，1991,「青年期における愛他行動の発達とその規定因」，川村学園女子大学研究紀要，第2巻 181－193.

松井　洋，1997,「愛他性に関する国際比較研究　―米国，中国，韓国，トルコ，日本の中学生・高校生を対象として―」，川村学園女子大学研究紀要　第8巻　第1号，107－119.

松井　洋，1998,「愛他性に関する国際比較研究Ⅱ　―日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象として―」，川村学園女子大学研究紀要　第9巻　第1号，175－186.

松井　洋・中里至正・石井隆之，1998,「愛他性の構造に関する国際比較研究」，社会心理学研究，第13巻　第2号，133－142.

中里至正・麦島文夫・松井　洋　他，1983,「凶悪な非行少年に関する研究調査」，総理府青少年対策本部委託研究報告書.

中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井　洋・瀬尾直久，1992,「非行抑止要因の文化差に関する研究―日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」，(財) 日工組調査研究財団委託研究報告書.

中里至正・松井　洋（編著），1997,『異質な日本の若者たち』，ブレーン出版.

千石　保，1991,『「まじめ」の崩壊』，サイマル出版会.

総務庁青少年対策本部編，1994,『世界の青年との比較から見た日本の青年―第5回世界青少年意識調査報告書―』.